

年上を敬え——という教えがある。  
幼い頃、この慣習を酷く嫌っていた。

長く生きていくだけで、どうして、偉そうにされねばならないのかと憤慨していた。  
しかし、最近、その慣習が、合理主義か、さもなくば、弱者救済のだと気付いた。

つまり、経験を重ねた年長者は、経験の乏しい年少者よりも優れていることが多い。  
ならば、優等なる年長者に、劣等なる年少者は従っていた方が合理だ。

故に年上を敬え——となる。

無論、年長者が優れているとは限らない。年少者に劣る年長者もいるだろう。

だが、それでも、年少者は年長者を敬わねばならない。

こういった事例こそ、かつては最も忌み嫌っていた旧悪のだが……しかし、それも社会を支える知恵なのだともようやくわかってきた。

年少者は劣等でも構わないのだ。何しろ、まだ若い。これから、少しずつ経験を重ねて優等になっていけばよいのだから。

ところが、年長者はそうはいかない。もう、若くない。経験を重ねる時間は残されていない。優等になる機会を既に失っている。これから先、ずっと、劣等なる者として、生きていかねばならない。哀れだ。

なればこそ、まだまだ未来に希望を抱ける年少者は、慈悲を以って、その手の年長者を扱わねばならない。

故に年上を敬え——となる。

アルリックシル・ディアウスは齡三十で——歳下の探究士ウラマーに哀れみの目を向けられ——  
ようやくその摂理にたどり着いた。



扉を開くと上司が二人、座っていた。

神御衣の色はカムミン 《黄》とアルリアスワル 《緑》——すなわち第四階梯と第五階梯である。最低位階の

《白》であるアルリックシルに比べれば、双方共にはるか雲の上の人である。

これは今のアルリックシルよりも上位という意味だけではない。この先アルリックシルは一生あの階位にまで上ることはない。故にこの兩名はまさに別世界の存在だ。

彼らの前には珈琲カフが三つ並んでいた。挽きたての甘い香りが鼻腔をくすぐる。つまり、

アルルクシルの給料では口にできない高級品である。

「座りたまえ。ああ、他に飲むかね？」

階位が上の方の上司——アルルクシル《緑》が柔らかな声で語った。

「い、いえ」と、アルルクシルは椅子に座る。

「では、どうして、呼び出されたか。わかるかね？」

階位が下の方の上司——アルルクシル《黄》が本題を切り出した。

「い、いえ」と、アルルクシルは己を偽った。

「ろくでもない話に違いないという予感だけはあったのだ。

「実は君に適性が無いのでは、という声が上がっていてね」

「わかってはいるはずだね？ 君は既に学生ではない。仕事をし、金銭を受け取っている立場だ。いかにこの《ウルル》といえども、成果を出せぬ者を抱えておく余裕は無い」

この時点で、アルルクシルは既にアルルクシル《黄》とアルルクシル《緑》の区別がなくなっていた。自分は無能だと判断されている。それで十分だった。それで十分、アルルクシルの頭は混濁に満ち満ちた。

「定期報告も読ませてもらったけれど、どうも、上から見下ろしている——という感じが出ているね。言葉が悪けれど、何様のつもりだという感じもする」

「それは……申し訳ありません」

言葉とは裏腹にアルルクシルは齒痒い思いだった。ではどういう風に書けばよかったのだ？ あの定期報告は任意提出ではなく、義務提出だ。アルルクシルが書きたくて書いたものではない。そして、報告書なのだから、客観的な表現を心がけねばならない。客観的な表現は俯瞰した視点が必要とするから、『上から見下ろしている』のは当然ではないか。それとも『下から見上げています』主観的な報告書でも書けばよかったのか？ それでは感想文だ。あるいはそれが目的なのか？ 客観的に書けば、『上から見下ろしている』と非難し、主観的に綴れば『感想文では駄目だ』と非難する……。

結局は人事をやりやすくするための道具ではないのか？

「それと、三ヶ月前の実験で君は所定の手順を無視して、作業を行ったね。君自身が報告書に残している」

「あ、あれは……」

「独自のやり方というのも悪くはない。だが、それは堅実な蓄積の上に成り立つものだ。失礼だが、君の技量では……」

「それはわかっています。しかし、あの時は……」

「何か事情でも？」

「はい。実はその直前の手順書に誤植があったのです。しかし、僕はそれでも、手順書通りに作業を続け、その結果、半日も時間を浪費しました。その次の実験手順——つまり、

今、問題になっている実験——も著者が同一で内容も類似していましたので、同じ誤植があるだろうと考え、その問題部分を回避した……」

「独自のやり方を試み、失敗。さらに半日も時間を無駄にした——と」

「……はい。しかし、それはあくまでも例外的な事例です。だからこそ、特記事項として、記録にも残していたのです。逆に言えば、その他の全ての事例で、僕は手順書通りの作業を行っています」

「そうか……これは我々の考え違いだったようだ」

意外な事に、上司は素直に訂正した。アルIIイクシルの際どい抗弁が功を奏した……

「しかし、既に君の処遇については上の方で結論が出ているのだ」

……わけではなかった。

「実を言うとね、配属の時点で君の資質を疑う声もあったのだよ」

アルIIイクシルは思わず拳を握り締めた。

しかし、さすがに向こうも人事の専門家である。鋭敏にその気配を察知したらしい。

「何か言いたげだね。言ってみなさい」

「……だったら、何故、僕は今の部署に配属されたのでしょうか……？」

その言葉を口にした途端に、アルIIイクシルの額から冷汗が出る。

組織の人間としてはギリギリの発言だということはわかっていた。

だが、上司二人はその言葉に憤ることすらなかった。その価値すらない人材ということなのだろう。

「なるほど、その通り。人事の失敗ということも事実だ。その点は上に伝えておこう」

「だが、それはそれとして——君は、一・体・何・なら・ば・で・き・る・と・い・う・の・だ・ね？」

「そ、それは……」

何も言えなかった。

——僕に何が出来る？

そんな自問自答の沈黙はアルIIイクシルにとって永遠にも思えた。

上司は苦笑しつつも痺れを切らした。

「いずれにせよ、これ以上、君の成長を待っている時間は無い」

「君は転属だ。教職資格の保有を考慮して、《テイルIIナIIノーグ》への『辺境文化派遣団』に任命された。詳細は後日、書面にて伝えよう」

「……！」

辺境文化派遣団——それは要するに左遷だった。

「ああ、飲み物は飲んでくれても構わんよ」

自分は厚かましい方だと思っていたのだが——アルIIイクシルは一滴もその珈琲を飲めなかった。

一刻後、道端で――。

「チーシュイいいいいいい、慰めてええええええええええ」

アルリックシルは己の奴隷マムルックに抱きついていていた。

だが、忠実なる奴隷――チーシュイは苦悩していた。

「我が君、我が君……」

「どうかしたの、僕の大事なチーシュイ？」

心なしか猫なで声になる。アルリックシルは最早三十路男であり、三十路男がこれをする和不気味だとはわかっていていた。だが、左遷を伝えられた直後なのだ。このくらいは大目に見て欲しい。

しかし、愛しのチーシュイは珍しく婉曲な物言いをした。

「……仰る通り、この身は我が君の所有物マルク――我が君のため一命を投げ出すことすらやぶさかではありません」

「嬉しいなあ。そんな風に言ってくれるのはチーシュイだけだよ」

「とはいえ」とチーシュイは言う。「俺も男なのですが」

それは一目瞭然だった。チーシュイは男である。

たしかに彼の顔立ちは奴隷らしからぬ程に整ってはいる。その上、髭がない。着痩せもする類だ。言語や人種のせいもあり、平均的なアツザフル人と比べれば、女性的と言えなくもない。

だが、そのごつごつした感触は紛れもない男のものだった。

「うん、知っているよ。君が立派な偉丈夫だということは抱きついている僕が一番よく知っている。いやあ、引き締まってって、実にいい筋肉だねー」

「……では、何故、公衆の面前で俺に抱きついているのでしょうか？」

「この傷心を慰めて欲しいから」

「……我が君に同性愛の趣味はなかったと思いますか？」

「うん、ない。むしろ、僕は女の子が大好きだよ」

「では、そちらに抱きついては？」

「僕が女の子を好きであることと、女の子が僕を好きであることの間には、大きな隔たりがあるのさ」

「………あんだ、もしかしてあれか？ 三十過ぎて童貞とかいう奴か？」

アルリックシルは失望と共に答えた。「認識が甘い、浅い。このアルリックシルを侮るな」

「……では意外と女には不自由していないと？」

「それは違うな、青年よ。<sup>フアクイ</sup>僕の彼女いない暦は実年齢に等しい。——すなわち、このアル  
Ⅱイクシル・デアウス、生まれてこの方三十年、一度も女性に好かれた事などない！」

「へ、へえ」と、チーシュイは形容しがたき顔で言い返した。「だからどうした？」

「だから、せめて、抱きついても文句の出ない君に抱きついているんだよ」

半ば諦めたかのようにチーシュイはため息をついた。偉丈夫にしては哀れな姿だ。

「……まあ、どうせ俺は奴隷で、俺の所有権はお前にあるもんな。しかたがないよな……」

アルⅡイクシルはくつくつと一笑いし、奴隷から手を放してやる。

だが、温もりから離れた瞬間に

——……自分はまだ駄目なのではないか？

という恐怖に襲われた。掌に馴染んだはずの藜杖を握る指にも力がこもる。別に今日に限った話ではない。二十歳を過ぎてからはしばしばの事だった。三十路を過ぎてからは尚の事だった。

実際、第一階梯<sup>アルリアフヤド</sup>《白》から第二階梯<sup>アルリアハマル</sup>《赤》へ昇進するのは、大体が十代後半から二十代中盤だ。三十代以降で合格する例はほとんどない。

理由は色々と推察できる。

貯金が尽きてくるとか、時間が無くなるとか、試験内容が若年層に有利とか、認めがたいが才能や活力が枯渇してくるとか……。

——もう何もやつても無駄だという絶望が自身の努力を阻害するとか……。

「はははははははははは」

アルⅡイクシルは乾いた笑いを漏らした。思わず長い付き合いの藜杖に縋り付く。

「……我ながら情けない。できない理由を並べても役に立たないというのに……」

「それでも、俺は聞いているぞ。その意味はわからんがな」

チーシュイは黙々と干し肉を炙りながら、アルⅡイクシルの愚痴に付き合ってくれる。

——ありがたい話だ。

とアルⅡイクシルは心底思う。

このチーシュイはかつて奴隷剣闘士として活躍し、今はアルⅡイクシルが買い取っている若干二十歳の奴隷である。

精悍と呼ぶに相応しい肉体で、篤実そのものの精神を包む壮士。おまけに眉目も何故か秀麗。息子を持つならこんな奴がいいという妄想を具現した男だった。アルⅡイクシルも彼に全幅の信頼を置いており、怖い人たちに囲まれた時、すかさず『チーシュイいつ！助けてえっ！』と叫ぶことは既に習慣となっている。

だが、この手の悩みの相談役としては、彼も不適合だ。

何しろ、チーシュイは東方の夏国<sup>シァクオ</sup>で幼くして徴兵され、しかも帝国と夏国との【河畔の

戦い】で、帝国の捕虜となり、その後は奴隷剣闘士としてひたすら刃を振るっていたのだ。

つまり、文字が書けない読めない、数も二十までしか数えられない——冗談抜きで、そんな状態だった。最近は随分と改善されてきたようだが……いやいや、世の中には『文字を読めるけど書けない』ことがあるのだとアルⅡイクシルも勉強させてもらった。

彼に彼自身の名前の書き方を教えてやると『これが俺の名前——俺の存在を示す記号！』と涙を流したりして、本当にどうしようかと思っただけくらいだ。

勿論、それは純粹さと言えなくもない。だが、アルⅡイクシルの出处進退について、彼と話すのは甚だ非建設的であるともいえる。そして、それをチーシュイ自身自覚しているから、口を挟まないのだろう。

——しかし、わからない男だよな。

なるほど、チーシュイは無教養な男だった。

だが、それを除けば、彼は紛れもない傑物である。無教養も剛毅木訥と考えれば、短所足り得ない。

チーシュイ程の人材ならば、欲しがる者は他にいたはずなのだ。金、名誉、美酒に美食に美女——それらをちらつかせ、彼を買いたいと望む金持ちは今でも少なくない。対して、アルⅡイクシルはそれらをチーシュイに与えられない（何しろ、下級探究士であるアルⅡイクシルは自分自身がそれらを持っていないのだ）。そんなアルⅡイクシルの奴隷にチーシュイが納まっている理由がさっぱりわからない。

——金持ちのドラ息子ではあるまいし。チーシュイは貧農出身だ。飯が食えねば己は飢え死にし、金がなければ想い人の病も癒せないことを知っている。人が生きるために富貴がいかに重要なのか、わからぬはずがないのに……。

何故かチーシュイはアルⅡイクシルの奴隷に納まっている。

不思議な男だ。

なるほど、チーシュイは帝国公用語たるアツザフル語を話せるものの、所詮《夏国》出身だから、アルⅡイクシルのように《夏語》を操れる者の下で働きたいのかもしれない。あるいは、アルⅡイクシルは駄目人間だから、その引け目故に奴隷への態度も自然優しくなる——という狙いがあるのかもしれない。

いずれにせよ、このアルⅡイクシル・ディアウスに過ぎたるものが二つあるならば、このチーシュイと両親の教育だろう。

……また、暗澹たる気分が湧き上がってきた。そう、両親の教育、父母の愛情、背後にある期待——そのすべてでも自分は裏切っている。

父は息子が探究士になることに最後までいい顔をしなかったが、それでも、自分の勉学に惜しみない出資をしてくれた。アルⅡイクシルが最低階位の《白》といえ、ウルルの探

究士に成れたのは父の愛と金の力である。別に賄賂などがあつたわけではない（母ならともかく、父がそんなことをするはずない）。他の者が汗水を流して、教本を買う金を貯めているところを、アルルクシルは寝ている間に親が同じ教本を買ってきてくれたのだ。家庭教師を何人も雇ったりもしてくれた。これで探究士ウラマーになれない方がどうかしている。だが、この歳になると父親が反対した理由がわかってきた。とどのつまり、父には人を見る目があり、それ故にアルルクシルには見込みがないとわかっていたのだろう。

「はははははははは」

アルルクシルは再び乾いた笑いを漏らした。

——『金持ちのドラ息子』とはまさに僕そのものだ……。

一方、チーシュイは黙々と干し肉に向かつていた。水気を飛ばした後、保存用に肉の部分だけを器用に切り取り、携帯食としては不要な骨の部分を放り投げる。

そこに一匹の獣が現れた。小さな猿である。

さすがに肉を奪おうとはしない。だが、猿は捨てられた骨を素早く拾い、逃げるように去っていった。

「残した肉があつたか……もったいないことをしたな」

だが、チーシュイは悔やみつつも、その小さな猿を殺そうとはしなかった。

そんな彼の優しさにアルルクシルは微笑ましい気分になった——が、自分は腐つても探究士ウラマーらしい。チーシュイの言葉の誤りを正さずにはいられない。

「残した肉などないよ。君の加工技術は十全だ。おそらく、あの猿は骨の隙間から脊髄液を啜るつもりなのさ」

「……そんなので腹の足しになるのか？」

「馬鹿にしちゃいけない。僕らの祖先だって、あんな風に生き延びたんだ」

「ほう、帝国人にもそんな苦難の時代があつたのか……」

「いや、歴史というよりも生物史の世界だけだね。あるいは文化人類学というべきか……えーと『進化論』って知っている？」

「……しんかるん？」

チーシュイは真顔で『それ、おいしいの？』と尋ねてきそうな雰囲気である。思わず、アルルクシルはため息と共に呟いた。

「……逃避エクスダス——か」

\*\*\*

この『テイルナノグ』は高緯度ながらも、暖流と偏風のおかげで、かろうじて『温

帯』に位置する島国である。

だが、所詮は北国だ。決して、暖かい国ではない。

それでもボウディツカは褌みそぎを欠かさなかった。実際には褌というよりも、只の水浴びに近かったが、わざわざ川の冷水に身を晒す行為には、肉体だけでなく、精神を清める意味があるのだろう。

ボウディツカはそれを毎日行っている。雨の日や風の日は、無論、冬の雪の日ですら、続けている。十二の時から四年間、一日たりとも欠かしたことはない。

プラスからすれば、平伏したくなる様な高潔さであった。

実際、尊敬し賞賛すべきなのだろう。

……自分が荷物持ちでなければ。

「おい、プラス！ 何をうじうじと項垂れている！ しやきつと胸を張って、顔を上げろ！」

ボウディツカから容赦のない叱責が飛ぶ。

仕方がないのでプラスは渋々顔を上げる。

そのせいで、ボウディツカの姿が嫌でも目に入る。

荒々しい声と鋭い眼の持ち主——ボウディツカは女だった。

背はそこそこ高く、顔も険しい。しかし、今の彼女の性別を間違うものはいないだろう。

彼女は全裸なのだ。文字通り、一糸纏わぬ姿なのだ。

柔らかな玉肌と奥深い曲線がボウディツカの性別を無慈悲なまでに主張してくる。

腰まで川に浸かっているものの、その水は清く透き通っている。その脚線はおろか、腰間すら目に入ってしまう。プラスは恐ろしくて、視線をなるべく上に向けるが、そうすると、今度は十六とは思えぬ見事な胸の膨らみが飛び込んでくる。若さに見合わぬ豊かさでありながら、若さゆえの張りがあり、その上に咲いた蕾は瑞々しく尖っていた。

——せめて、あの髪で隠してくればいいのに……。

プラスは妬むような目で、ボウディツカの赤い髪を見た。

腰下まで伸ばした豪華な赤毛は炎の如く風に揺れている。

それは髪的美しさを引き立てつつも、肉の艶を隠さずにいた。

そして、それがプラスには困る。

プラスは褌の間、ボウディツカに荷物持ちをやれと言われた。故にプラスはボウディツカの脱いだ服——まだ温もりを含んだ下着も含む——を持ちながら、彼女の隣にいる。

だが、ボウディツカは十六で、プラスは十四、既に子供とは言いがたい歳である。

それこそ、ボウディツカは顔立ちにこそ少女の面影があるものの、その肢体は早熟で完全に女のものであったし、プラスは未だ少女と間違われるものの、男なのだ。

だから、気を抜くと、プラスはボウディツカの見事な肢体に見とれてしまう。



それでも、ボウデイツカはその裸身を恥らうことも隠すこともない。  
ボウデイツカのすべてがプラスには丸見えである。  
それが恐ろしい。

——…結局、自分など眼中にないのだ。

当然だろう。ボウデイツカにとってプラスは弟であり、子分である。

だから、唾を飲みながら、

「姉さま」

と血の繋がらない姉に今日もプラスは声をかけるのだ。

「文化派遣団の探究士がやってきたよ。今はフアリアスの宿で休んでいる。明日には陛下に謁見するって」

「文化派遣団ねえ。こんな田舎に飛ばされるとは、そいつもついてねえな」

「でも、その探究士は《ウルル》の所属らしいよ」

「…それは驚きだな」とボウデイツカはその赤い瞳を大きくする。「アツザフル帝国から探究士が来るとは聞いていたが、まさかそれがウルルの探究士だとはな…」

アツザフル帝国といえば、今や世界一の大国だ。何しろ、生産力や軍事力においては夏国に匹敵し、政治力や技術力においては夏国をも凌駕する。そして《ウルル》とは、そのアツザフル帝国の最高学府にして最大学会たる皇帝直属の学術機関を指す。

「つまり、世界でも有数の頭脳がやってくるんだね」

「どうか。ウルルは最高学府であると同時に最大学会だ。所属している探究士の数も世界一になる。穿って考えれば、そこにいる探究士の質だって、ピンキリになるさ」そこでボウデイツカはふと思いついたらしい。「そいつの神御衣の色は？」

「え…：神御衣？　そういえば、何か羽織っていたけれど…：色までは…：」

覚えていない——とプラスが言外に伝えると、ボウデイツカは大きくため息をついた。

そして、プラスの目の前に立ち塞がり、両手を腰にやった。胸を張る姿勢になり、当然色々と目に焼きつくのだが、ボウデイツカは意に介さず、堂々たる教師の口調で解説する。

「ウルルの神御衣は八種類。最下級探究士には《白》一色の外套、そこから、《赤》、

《橙》、《黄》、《緑》、《青》、《紫》の六階を経て、最高位の探究士に至ると

《黒》一色の法衣が与えられる。——だから、色を見れば、どの程度の奴が派遣されてきたのかがわかる…：って、おい、ちゃんと聞いているのかよ」

そして、ボウデイツカはプラスの頭をぼんぼんと叩き始める。プラスは一応

「き、聞いているよ」

と応えたものの、内心は目の前で揺れる乳房にそれどころではなかった。

「まあいい、直接確かめよう。王への案内はあたしが勤める」

アルⅡイクシル達がティルⅡナⅡノグ島について数日——旅の疲れが癒された頃、ようやくこの島の王へ謁見が叶う事になった。

彼女（辺境らしく女王）の許しを得た上で、初めてアルⅡイクシルたちアツザフル帝国辺境文化派遣団は活動を始められる。

ちなみに辺境文化派遣団とはいっても、今、ここにいるのはアルⅡイクシルとチーシュイの二人だけだ。その内、チーシュイはアルⅡイクシル個人の私的奴隷であるから、実質、アルⅡイクシルのみで構成された文化派遣団である。

こんなのでいいのか？——と当初上司から説明を受けた際にはアルⅡイクシルも不安になったものだ。が、とりあえずは妥当なところらしい。

今から会う女王とて、このティルⅡナⅡノグ全体の支配者というわけではない。島に何人もいる王の一人に過ぎない。そもそも王というのも便宜的なもので、その実質は部長と呼ぶのが相応しい程度だ。

ただし、アツザフル帝国が彼女を『ティルⅡナⅡノグ島の王』と認めたからには、それなりに有力な女王であり、またそうなるてもらわなければ困る。さらに言えば、その資質はある。何しろ、辺境文化派遣団の受け入れを認めたということは、少なくとも帝国の強大さを理解しているということだ。夜郎自大が多い辺境の中では、珍しく大陸バハムートの広さを知っているのだろう。

彼女がこのティルⅡナⅡノグ全体の利益代表者になる日は遠くない——ということらしい。

と、同時に現時点においては、さほどの有力者というわけでもない。向こうもそれがわかっているから、派遣されるのが末端の探究士——アルⅡイクシル一人であつても問題はない。むしろ、他の部族長たちを下手に刺激せぬためにも、低位探究士が少数で来訪することを望んでいる。

なるほど、不自然な話ではない。とはいえ、いきなりこんな辺境に飛ばされた身としては——どこまで信用していいものやら——という不安もある。

「陛下のところ以案内するよ、付いてきな」

という乱暴だが正確なアツザフル語が飛んできたのは、アルⅡイクシルがそんなことを考えていた時だった。

「あなたは？」

「案内役さ」

そう名乗ったのは現地住民の娘だった。

見ると娘の後ろには少女——に見える中性的な少年が背囊を背負って付き従っている。

いや、娘の方もまだ少女と呼べる歳なのだろう。だが、その見事な肉体と、それを誇示する露出のためか、やけに大人びて見えた。

例えば、金銀の頸環を左右の手首と足首に、また奇妙な肩当と腰当も左右に、計八つを身に付けている。そして、彼女が四肢に身に付けている人工物はこれだけだ。これらを若々しい素肌直に身に付け、すなわち、二の腕も太腿も丸出しという有様である。

四肢以外の体幹部も似たり寄ったりで、首周りや臍を含む胴回り、挙句の果てに臀部の膨らみまで丸出しだった。その豊かな乳房は胸当てで抑えているが、隠しきれてはおらず、股間ですら禪を巻きつけているに過ぎない。

北方系の白い肌が嫌でも目に入る。

いかに未開の地とはいえ、普通ここまで北方となれば、肌を外気にさらさぬ工夫をする。

実際、娘の後ろにいる少女のような少年は、分厚い布の服に身を包んでいる。

この娘が春売りの類なのかとも考えたが、それに相応しい媚態がない。さらに付け加えれば、羞恥の色もない。むしろ、自身の肉体に対する自信が垣間見えた。

実際、娘は野趣溢れる美貌であった。その体軀も妖艶なまでの線を描きつつ、なお、律動的な均整が取れている。……が、

——女の荒々しさは内に秘めていればよく、それをあからさまにすべきでない

というアル・イクシルの好みからすれば、芳しくはない。やはり、女性は赤い飾り布が似合う黒髪で、吸い込まれそうな黒い目で、ついでに肌を包み込むのは暝天の如き漆黒が一番である。

——せつかく僕は女性にもてないのだから、志は高く持つべきだ。この娘も醜女ではないが、この程度で満足してはいけない。うん。

そんな事を考えながら、アル・イクシルは共に旅をした藜杖を手に取り、さらに調整が終わったばかりの《無垢なる純白の外套》を羽織る。

この袖なしの外套はウルルの神御衣の一種であり、身分証明と一級礼装を兼ね備えている。王の前に出るならば、これが必要だろう。

すると、娘は「ははあ、《白衣》ね」と呟いた。

……わざわざ、アツザフル語で。

どうやら、娘は《白》が最低階位を意味すると知っているらしい。露骨に侮蔑の色があった。これには付き人らしい少年（？）が、後ろから娘に囁く。

「……ポウディツカ姉さま、まずいよ」

だが、その『ポウディツカ姉さま』は眦を上げた。

「五月蠅い、プラス。お前は黙ってる」

そうやって、娘は容赦なく少年を蹴り付けた。それも一度ではない。何度も何度も蹴り付ける。その酷薄な態度にアルルクシルはプラスと呼ばれた少年がやはり男性であると確信した。もし、プラスが女性であれば、いくらなんでも、こんな扱いは受けまい。

もっと言えば、ボウディッカとプラスは実の姉弟には見えない。プラスは柔らかな顔立ちと、貴族の少女にしか見えない華奢な身体の持ち主だ。美人ではあっても、獣性を垣間見せるボウディッカとは違い過ぎる。

おそらく擬制姉弟だ。二人の間に血縁はないこともないが、それよりも歳の近い者同士としての絆が強いのだろう。ただし、明確な上下関係を伴ったの絆が……。

「気に入らん」と小声でチーシュイは言った。

「そうだね」とアルルクシルは同意する。

ボウディッカは蹴飛ばされたプラスの首を掴み、何やら現地語で言っている。

翻訳こそできないが、大意はわかる。

誰が口出ししていいと言った。貴様は黙っている。おとなしくあたしに従っていればいいんだ——そんなところだろう。

アルルクシルはチーシュイほど慈悲深くない。だが、今は同情していた。アルルクシルも子供の頃、あんな風に見下されていたからだ。あるいは今でも見下され続けているからだ。

だから、アルルクシルは己に言い聞かせるように説いた。

「……辺境なんて、こんなものさ。男性の権利が認められるようになったのは、帝国でもここ百年ほどのことだ。そしてその気風は未だ辺境まで届いていない」

「その気風を届けるのが、お前の仕事というわけだ」

「正確にはその土壌を作るのが僕の仕事だ。他者への配慮は生活の余裕から生まれる。この島国の生産力が向上すれば、それも生まれる。そのための知識と技術を伝えるのが僕の仕事だ。——が、それは中長期的な視野であり、短期的な視野を疎かにする理由ではない」

最後の一言でチーシュイは、アルルクシルの意図を悟ったらしい。

チーシュイは二人の間に割り込もうとする。

無論、彼の大刀はいつでも抜ける姿勢である。大分使い込んでいるため、あちこちガタが来ている骨董品だが、小娘一人を切り殺すのは容易い。ましてチーシュイの腕なら……。するとボウディッカは

「プラス——」

と冷たい声で呼びかけ、その首を手離した。

解放されたプラスは背囊の中から、大振りの山刀を取り出す。そして、その重さに身体を傾けながらも、抜き身の山刀をボウディッカの手に渡した。

チーシュイは歩みを止める。

ボウディツカは山刀の感触を確かめるように振り回していた。手馴れた様子で、二度三度と、しかも軽々と……。

そのままチーシュイとボウディツカは無言で対峙する。

もし、まともに斬り合えば、チーシュイが勝つ——とアルリックシルは確信している。

このボウディツカという娘も、腕に覚えがあるようだが、チーシュイには及ぶまい。剣闘士時代の彼の戦歴はそれを証明している。実際、アルリックシルはチーシュイが白兵戦で負けるところを見たことがない。

——最大の問題は後始末だな。それに相手が先に抜いているという点ではチーシュイがやや不利か……。

とアルリックシルが悩んでいると、ボウディツカがいきなり山刀を降ろした。そして、そのまま、彼女は山刀を腰当に結ぶ（アルリックシルはようやくあの肩当と腰当が、荷物を固定するためのものだと思いついた）。

「ちなみにあたしは案内だけでなくあなたの護衛も任されていますんで、よろしくお願ひしますよ——」  
アルリックシル：ムラート・アプヤド  
「白衣の賢者様」

ボウディツカは雌獅子を髣髴とさせる笑みを見せた。

\*\*\*

チーシュイはボウディツカを信用すべきでないと訴えたが、アルリックシルに選択の余地はなかった。今は彼女についていくしかない。そう決断して、荷物を纏め始めた。

そして、チーシュイには持ってきた蔵書を荷車に積んでもらう。

これらはアルリックシルの私物であるが、資料として帝国から運んできたものだ。紙の本とはいえ、重くかさばる。だが、いつまでもこの仮宿においておくわけにもいかない。

——ついでだから、この島の女王とやらに閲覧してもらおうのも悪くない。

と、アルリックシルが考えているとあの娘が近づいてくる。

「凄い量の本ですねえ」

意外にもボウディツカの口からは賞賛の言葉が出た。

「手当たり次第に持ってきてしまいました。整理が苦手なもので、恥ずかしい話です」  
そう返したアルリックシルはまだボウディツカの意図を勘繰っていた。

だが、ボウディツカは知的な光をその瞳に湛える。

「ちなみに鋼の焼き入れ方についての本などはありますかね？」

「製鉄についてですか？」

「ええ、これなんですがね」とボウディツカは腰の山刀を叩いた（プラスはまともに臀部を見てしまったためか、頬を染めていた）。「我ながらいい刀だとは思いますが、だけ

ど、どうも粘りが足りない。この土地の鉄鉱石自体に問題があるのかもしれませんが、技術で解決できるのなら、是非御教授いただきたいのです」

「ああ、多分それは炭素含有の問題ですね。それなら、イブンⅡザンギーの《鉄史要諦》がいい。確か六十頁目位に……」

そう言って、アルⅡイクシルは手垢で汚れた書を手に取る。単純なもので、蔵書から抜き出した瞬間——久々に読み返したい——という気分になっていた。何しろ、イブンⅡザンギーの《鉄史要諦》はアルⅡイクシルにとって、お気に入りの一冊である。

「ここです、ここ。ここにあるように硬度と粘性を高い水準で両立させた『鋼鉄』の生産には、やはり炭素含有率が問題になってきます。定量的に言えば、質量百分率で0・02から、2の間ですね。この基準さえ満たせていれば、概ね『鋼鉄』と呼ぶに足るでしょう。

しかし、切断に特化した真の『鋼』<sup>刃金</sup>を考えるならば、均質な炭素含有率で刀身を形成するよりも、むしろ、その部位の目的に応じた性質の鋼を用いるべきです。そも鋼鉄の長所はこの炭素含有率を調整することで様々な特性を発揮する点にあると言っても過言ではありません。例えば、含有率の低い鋼、質量百分率で0・1から0・2の鋼は、特に『軟鋼』と呼ばれ、文字通り相対的に軟らかい鋼ではありますが、延性・展性に優れ、あなたの求める粘りがあります。反面、含有率を上げ、質量百分率で0・35から0・5程にすれば、極めて硬い文字通りの『硬鋼』となりますが、反面、延性・展性に劣り、今のあなたのような悩みが生まれます。とはいえ、軟鋼だけで刀身を形成したとすれば、それは最早鈍器でしかありません。そこで考えられるのは、この百四十頁にもあるように刀身の芯を『軟鋼』で作り、その周りを『硬鋼』で囲むという二重構造です。このように形成された刀身は薄く細くしなやかであるばかりか、疑似的な自己修復能力——精霊結晶のような生化学的な『回復』ではなく、物理的粘性による『復元』——が期待できます。仮に骨肉を切断する際に曲がったとしても、時間をおけば、『元の鞘に戻る』事ができるのです。あ、ちなみにこの現象、某国では慣用句にもなっています。しかし、この《鉄史要諦》の面白いところは、ここまでを基本とし、さらに鋼鉄の性質を特化分別できないかと考えている点です。すなわち、三百頁目からの部分ですね。従来、含有率だけが問題になっていた鋼鉄中の炭素について、その結晶構造も鋼鉄の性質を左右するのではないかと着想です。すなわち、ある種の高品位鋼はその表面に縞模様を作りますが、これは溶けた鋳鋼がゆっくり凝固する際の内部結晶作用により……」

と気が付いたら、アルⅡイクシルは荷造りを中止していた。目を輝かせて、ポウディックにこの書の素晴らしさを説いていた。

チーシューイは厳しい顔つきだ。

考えてみれば、この時、既にアルⅡイクシルは術中に嵌っていたのだろう。あるいは、この奇妙だがやけに露出の多い格好も、なんだかんだといつて若く美しい娘であるポウデ

イツカの罫なのかもしれない。

「……なるほど、これらの書を後で貸していただけますか？」

ボウディツカは一読した後に淑々と申し出る。アルルクシルは迷わず「ええ、勿論です」と了承していた。客観的には馬鹿馬鹿しい話だが……

——この娘、なかなか見所がある。

とアルルクシルは入れ込んでしまった。この娘が先程プラスという少年に暴行を加えていたことを考えれば、彼女への好感は抱くべきでない。だが、ボンボン育ちのアルルクシルは結局お人よしなのだ。このボウディツカという娘への嫌悪を維持できなかった。そこに付け込むようにボウディツカは「いやあ、これはありがたい」と、感謝を述べ、値踏みをするように尋ねてくる。

「そういえば、賢者様は、世界に冠たるアツザフル帝国の出身なんですか？」

「ええ、僕はムンダペレで育ちました」

「うわ、アルルクシル帝都じゃないですか」

「そうなります」

「そんな世界一の大都会からすると、こんな島国なんて田舎でしょう」

「開拓の余地のある場所……ですね」

雑談しながらも、アルルクシルは少しばかり訝しみ始めた。

彼女はすらすらとアツザフル語を話している。荒つぽく訛りの強いアーレンミヤ通俗語になっているが、その分、彼女流に使いこなしているともいえる。実に流暢だ。

アツザフルが【世界帝国】である以上、その公用語であるアツザフルのフスハー正則語は、ある種の国際標準語となっている。そのため帝国の外縁に住む者でも、上流階級ならばある程度アツザフル語を使えるものだ。が、母語でない以上、多少のぎこちなさが常である。

ところがこのボウディツカはアツザフル育ちの自分とほぼ同等に話していた。

「しかも、《ウルル》に所属しておられるとか？」

「ええ、一応、僕も《ウルル》の所属です」

「ウルルといえば、皇帝直属の学術機関」

「一応ですよ、あくまでも、一応です。末席を汚しているだけの落ちこぼれです」

「……『一応』ねえ……」

その言葉に突然ボウディツカは鋭い目になった

「で、こんなド田舎なら、おちこぼれの自分でも通用するってわけですか。舐められたものですね」

この発言にはずっと黙っているチーシュイも顔をしかめた。よく見るとプラスの方も再びアタフタしている。

「……さあ、それはわかりません。僕は僕なりに職務を果たすまでです」

アルルクシルは当たり前障りのない言葉を選んだ。

「はっ、気取りやがって」ポウディツカは露骨に蔑む。「自分の所属を語るのに『一応』と付ける奴にろくなやつはいないんだよ」

「……僕よりも大きな成果を上げている同期も多いのです。彼らと同じ俸禄を食みながら、彼らと同じ成果を上げられぬ己を恥とするのは当然では？」

アルルクシルは反駁しつつも——まずい——と焦っていた。ここで彼女と険悪になるべきでない。しかし、状況は売り言葉に買い言葉になっている。

ポウディツカの方はむしろ生き生きと声を荒げ始める。

「だが、それは貴様がウルルという名門の出であることを鼻にかけていることと同義だ」

「当然でしょう。それを誇りに思わない奴がいたら、それは信用できない人間です」

「信用できないとは何故だ？ 名門出がそんなに偉いのか？」

「ウルルを含むすべての組織は人の集まりです。その中で僕は師父に習い、朋友と学びました。無論その合わぬ者もいましたし、僕の交友はさほど広くありません。しかしそれでも、僕は概ね彼らを尊敬しているし、彼らを悪く言われたら腹が立ちます。それとも、あなたは親や友を尊敬していないのですか？」

「……いや、そういうことはないが……」

後になってみれば、ポウディツカは少し悲しい顔をしていたと思う。だが、アルルクシルはまるで気付かなかった。

「そうでしょう。長く共に過ごした者たちから、尊敬できる部分を見い出せず、あまつさえ、彼らへの誹謗中傷を何とも思わぬ者など、僕は信用できません」

そこでアルルクシルは一呼吸を置いた。やってしまった——という後悔もある。これでこのポウディツカとの関係は大幅に悪化するだろう。だが、それと共に——言ってみよう——という興奮もある。

いずれにせよ、もう後には引けなくなっていた。

「ところで僕らは見解が一致したのですが、一体僕の何が不満だったのですか？」

彼女は何も答えなかった。

\*\*\*

「私がこの島の王アンドラストです」

女王の自己紹介は一応アツザフル語であったが、あのポウディツカのものよりは数段劣っていた。無論、テイルナノグの人間がアツザフル語を苦手なのは当然だ。アツザフルの人間が、テイルナノグ語をほとんど話せないのと同じである。

そう考えると、あのポウディツカがいかに規格外の娘であるかがよくわかる。



——…まあ、格好からして規格外だったよな。

例えば、眼前の（おそらくアルⅡイクシルと同年代であろう）女王アンドラステもさほど奇矯な格好をしているわけではない。

髪はおろか眉まで隠れるほどの分厚い布に身を包んでおり、豪華な頸環トルクを幾つも身に付けているが…それだけだ。

服自体は、ごく普通の長衣であり、それを重ねることで威厳を示しているに過ぎない（むしろ、周りに並ぶ女官たちの方が刺激的であった。何しろ、一枚の薄い布を文字通りの貫頭衣かんづゑにしており、それ以外に肌を隠すものがなかったからだ。とはいえそれはボウデイツカのような挑発的な露出ではない）。

もつと言えば、ここに来るまでに見かけた他のむらさめ邑娘と似たような衣類を身に付けていた。王とはいえ、小さな国なのだ。庶人や貴人との隔たりも大きくないのだろう。王権を示すのも、珠玉や金銀の飾りだけである。また、それらの飾りですら、アルⅡイクシルという異国からの賢者を迎えるためのものであり、日頃から身に付けているものではない。

暴君ではなさそうだ。

——しかし、《アンドラステ》……ねえ。

たしか、アンドラステとは、この地方に伝わる『戦争と勝利の女神』だったはずだ。

——彼女は女神に仕える巫女であり、女神そのものであり、それ故に世を統治する。まさに神権政治だ。帝国では一掃された文化も、ここでは残っている…と。

だが、アルⅡイクシルは少しばかり悲しくもなった。

ティルⅡナⅡノグの歴史は古い。アルⅡイクシルが読み漁った古い文献にも度々その名は出てくる。

だが、かつてのティルⅡナⅡノグでは、戦女神を祀るなど考えられなかっただろう。

元々ティルⅡナⅡノグの住人は『羊のように』という形容される穏やか民族だった。

遊牧という生活形態もあって、土地の争いなどには執着せず、異民族との不和の兆しがあれば、一方的に立ち去るという手段で解決していた。彼らの言語には『戦争』という単語も概念もなかったという説すらある。

…だから、殺された。

どんなに痛めつけても反撃しない彼らは他民族にとって狩りの対象でしかなかった。

特に前王朝にとっては絶好の獲物だった。祭政一致だった前王朝では占いが今とは比べ物にならない重みを持っており、占いのためには生贄が必要とされたのだ。

そのために大量の羊や牛、あるいは犬——そしてヒトが殺されていた。

いわゆる『人牲』——文字通り人間の犠牲は生贄の中でも特に上質とされ、好んで首を刎ねられていた。彼女たちは何事も占いをし、神の言葉に従っていたから、しばしば、人牲は不足することになった。そして不足した人牲の補給のために、日常的にティルⅡナⅡノ

ーグへ上陸し、その住人を殺戮して回っていた。だから、アツザフルで革命が起きた時、ティルⅡナⅡノグの民は前王朝打倒に協力した。

一方的に殺される側から、抗い、戦い、あるいは殺す側に回ったのだ。

そう、今やティルⅡナⅡノグも『戦争』という概念を受け入れた。この温厚に見えるアンドラステにも実戦経験がある。かつてのように他者との不和を己が立ち去るのではなく、相手を殺すことで解決する道を選んでいる。帝国の英知を習おうとするのも、そのための手段なのだろう。

当然と言えば当然だ。いつまでも殺されるだけに甘んじているわけにもいくまい。

——だが、本当の意味での『妖精の樂園』ティルⅡナⅡノグは既に失われているのかもしれない。

ある意味、帝国のような『文明国家』が種となり、牧歌的だったこの地に『戦争と勝利の女神』を芽吹かせ、あげくポウディッカのような好戦的な娘を生み出してしまったといえる。

……その後、ポウディッカは険悪な雰囲気のまま道案内をした。その割にチーシュイとはちらちらと見詰め合っていた。その気があるのなら、美男美女でお似合いだ——とアルⅡイクシルは勘繰っていたが、アンドラステのところまで到着した直後、ポウディッカはプラスと共にどこかへ立ち去ってしまった。

——誰かをあんな風に言い負かしたのは久々だったな。

再び後悔の念が募る。

やはり、あの分かれ方は好ましくない。彼女の自尊心を傷つけたところで、アルⅡイクシルには何の得もない。今後、彼女の協力を得にくくなるだけ損である。

——大人の対応ではなかった。

ましてや、ポウディッカはアルⅡイクシルよりも十以上も若いのだ。ならば、多少の無礼は許容する度量を見せるべきだった。

それこそ、アルⅡイクシルもポウディッカの年頃には『議論魔』と呼ばれていた。ポウディッカのように暴力に訴えることはなく、奇矯な装いをするわけでもなかったが——今とは違い——納得のいかないことがあれば、誰彼構わず論戦をふっかけていた。

その結果、勝とうが負けようが、互いに得るものがあるはずだと考えていた。本気でぶつかり合っただけで、掴めるものがあるはずだと思っていた。

——……現実にはすっかりおちこぼれてしまったのだが……。

省みれば、アルⅡイクシルは勘違いをしていたのだろう。

ポウディッカと違い、アルⅡイクシルは無能だったのだ。鋭利過ぎる故に挑戦的なポウディッカと違い、アルⅡイクシルは身の程を知らぬが故に噛み付いていたのだ。

「ふふ」

思わず微笑んでしまう。

アルルクシルは何だかんだといって、ボウディッカに惹かれていた。少なくとも、その実力を過去の自分より高く見積もっている。アルルクシルに突っかかってきたのも『有能で有望な若者』ならばこそと思いたがっている。

——いやいや、今は集中しないと……。

心地よいまどろみから、アルルクシルは気分を切り替える。

仮初にも一国の王であるアンドラステが一介の探<sup>ウラマ</sup>究士であるアルルクシルのために、アツザフル語で謁見してくれているのだ。国力差があるとはいえ、これはアンドラステの厚意ゆえだ。アルルクシルは謹んで傾聴せねばならない。

儀礼的な言葉がアンドラステの口からつらつらと流れ出ていた。どうやら、形式を重んじる女王のようだった。堅実な姿勢ともいえる。帝国の友好を喜び人材の交流を許す——という内容が、典雅かつ当たり障りのない表現で伝えられる。

だが、歌うようなアンドラステの言葉がいきなり途切れた。

そして、一呼吸の後に、女王は初めて形式から外れた言葉を口にした。

**「ボウディッカ……あなたをこの場に招いた覚えはありませんよ」**

\*\*\*

ボウディッカはあの奇異な格好で現れた。周囲の女官たち厳粛な衣服との差が激しい。

その上、取り巻き付きだった。それもあの辺境らしからぬ穏やかな少年(?)ではない。むしろその逆のいかにも辺境出身者らしい荒々しい者ばかりだ。

数にして十人近く——筋骨隆々とした大男やそこにしな垂れかかる若い女——共通するのは、民族色の強い衣を纏っていることだ。ついでに言えば、武闘派なのだろう。露骨に刃物を光らせている者も少なくない。

「固いことは言いつこなしにしましよーや。女王陛下、どんなに取り繕ったって、あたしりや、所詮、蛮<sup>ハムギイ</sup>族なんですから」

そう吐き捨てて、ボウディッカはアルルクシルに向き直る。

「賢者様。あんた、あたしを馬鹿にしているだろう？」

「……根拠もなく、己を卑しむのはよい趣味とは言えませんね」

稚拙な言動にアルルクシルはボウディッカへの評価を下方修正する。

「わかんねーかな。あたしや、あんたに決闘を挑んでいるんだよ」

「お断りします。僕には何の利益もない」

「じゃ、一方的な暴行だな」

この一言に「ボウディッカ！」と女王も声を上げる。

しかし、ボウディツカは構わず朗々と主張する。

「あたしにはあたしらの、ティルⅡナⅡノグにはティルⅡナⅡノグのやり方がある。それを曲げて、帝国のやり方を受け入れるというのなら、それなりの優秀さを示すべきだ」  
女王がボウディツカに向けて剣を抜いた。剣は武器というよりも祭具である。が、その刃は飾り物ではない。どうやら、この穏やかに見える女王も辺境らしく武断の人らしい。  
「小娘が賢しらに――。私に逆らうならば、斬り捨てるまでです」  
「陛下……」 「アンドラス様……」  
とボウディツカの取り巻きたちが慄く。どうやら、彼らも女王とボウディツカの決裂は望んでいないらしい。要はアルⅡイクシルという帝国官僚を拒みただけなのだろう。女王そのものには畏敬の念があるように見えた。

――僕はとんだ疫病神だ……。

アルⅡイクシルは心の底から帝国に帰りたくなかった。実際、ボウディツカ一党の主張もわからないでもない。所詮アルⅡイクシルはこのティルⅡナⅡノグでは余所者だ。図々しく立ち入ってはならぬ領域というものもある。

……問題はここで帝国に帰ったとしても、ろくな未来が待っていないということだ。  
「わかりました。その決闘の申し出を受けましょう」

アルⅡイクシルは苦渋の判断を口にした。

「しかし、私は決闘の心得などありません。代理として、このチーシュイと……」

「いや、それはもう終わっている」

ボウディツカはアルⅡイクシルの譲歩を突っぱね、訳のわからぬ事を言い出した。

「……終わっている？」

「気付かなかったのか？ その奴隷は強いぜ。何しろ、今日あたしは三回死んでいる」

「……生きているじゃありませんか？」

「だから、道案内の最中、あたしは何度もあんに斬りかかろうとしたんだよ」

アルⅡイクシルは言葉に詰まった。

「ところがその度に、そのの奴隷の兄ちゃんに邪魔された。ま、鈍いあんたは気付かなかたのかもな。だが、あたしが斬りかかろうと足を動かした瞬間、その兄ちゃんがすかさず間合い詰めてきた。もし、あたしが抜こうものなら、間違いなく返り討ちだったね」

反射的にアルⅡイクシルはチーシュイに目を向ける。すると彼は

「……事実だ。この小娘、相当使える」

と脂汗をかきながら、他者に聞こえぬように呟いた。

「一度目は首、二度目は腹、三度目は脳天……」 ボウディツカは指を折って数えていた。

「いやあ、綺麗な顔をしてあげつないねー。兄ちゃん」

――そんなに強いのか？

武芸などからつきしなアルルクシルにはさっぱりだが、世の中には『刃を抜かずとも、腕の差がわかる』という事があるらしい。それこそ、達人の世界に限定されるものの、彼らの間では、斬り合った後にどちらの刃が先に届くのが、斬り合う前にわかるのだという。探究士が己の知性と知識を元に物理現象の思考実験をするようなものとアルルクシルは考えている。しかし、思考実験には探究士に相応の実力が要求される。『刃を抜かずとも、腕の差がわかる』ためにはそれ以上の実力が必要だろう。チーシュイにはそれがあるらしい。これは疑っていない。彼の腕前は本物で、そんな化け物じみたところがあっても不思議ではない。

そして、このボウディッカという娘にも同様の能力がある——らしい。それはつまり、彼女がチーシュイに匹敵する実力者ということになる。

「ならば、わかったでしょう。所詮、あなたは井の中の蛙ということを」

女王は正論を説く。ところが、ボウディッカはとんでもない事を言い出した。

「いやいや、ですからね、あたしゃあ、この賢者様自身に戦っていただきたいんですよ」  
アルルクシルは頭が真っ白になって、次の言葉が出てこなかった。

「馬鹿馬鹿しいことを！」

代わりに女王が声を荒げる。その剣も心の昂ぶりに応え、灼熱に輝いていた。どうやら、あの剣は精霊結晶製——いわゆる神剣らしい。

「賢者様の本分は勉強です。武芸を競うならば、その奴隷を相手とすべきでしょう」

「ですから、勉強ばかりの役立たずでないことを証明してもらいたいですよ」

「ふん」

思わずアルルクシルは鼻で嗤った。それが自嘲であった。

——帝国では勉強が足りぬと蔑まれ、辺境では勉強ばかりで役に立たぬと侮られる。では僕はどうすればいい？

「……証明するまでもない」アルルクシルは自棄になっていた。「僕は真正銘の役立たずですよ。だからここにいます。それがどうかしたのです？」

その言葉にボウディッカも口籠る。

だが、女王は少し考え込んでから、思いついたように言葉を繋いだ。

「帝国と辺境の違いは、そういった者がいるかないかです。あえて言えば、あなたが競おうとしている個人的な武勇では、彼ら帝国よりも我ら辺境が上でしょう」

それはまた正論であった。

過酷な自然の中で生活している辺境の民は剽悍である。安穏な都市の中で生活している帝国の民は脆弱である。チーシュイは帝国でも例外の強さであり、平均を比べれば、明らかに辺境の民の方が強い。

「ただ、それでは及ばぬところがある。故に習うのです」

女王は『アルルクシルが勉強ばかりの役立たずか否かは問題でない』と言外に告げていた。

だが、ボウデイツカは引き下がらなかった。

「それでは納得できぬ者もいる。——陛下とてお解かりでしょう？」

「……あなたがそれを言いますか？」

女王アンドラステは静かに嚇怒する。大気の中の精霊がパチパチと火花を散らせる。どうやら、精霊への干渉力は強大である割に、その制御力は貧弱なようだ。いかにも辺境の女王らしい。明らかに理性ではなく感情によって、精霊の業火を引き寄せつつある。

「そもそも、あなたの論いに耳を貸すという懦弱を見せたのが誤りでした」  
火の粉を纏いつつ、女王は剣を翳し……。

\*\*\*

「……お待ち下さい」

と、アルルクシルが口にしたのは、女王の刃がボウデイツカの首にかかる寸前だった。どうか、自慢の肌は既に大分火傷を負っていた。

——ギリギリだな。もっと早く決断してくれよ。そんなことだから、その歳でまだ

アルルクシル・アブヤド  
白 衣 なんだぜ。

ボウデイツカは外観においては息をつき、内心では罵っていた。

一方のアルルクシルは

「殺すのなら、その娘を僕の実験材料にさせて下さい」

と頭でつかちらしい婉曲さで、ボウデイツカの助命を願う。

「実験材料ですか？」

「はい。僕が勉強ばかりの役立たずか否かを見極める実験材料です」

「……それはこの娘の決闘を受けるということですか？」

「決闘ではなく、動物実験です。命を懸ける必要はありません」

「……賢者様がそう仰られるのでしたら……」

と女王は折れた。澄ました為政者の顔に戻り、剣を収める。

半ばボウデイツカの計算通りだった。この女王の沸点は低いが、長続きしない。怒りを持続させる忍耐に欠けるのだ。それは寛容にも繋がっているもの……。

——所詮は蛮族ということさ……。ま、刹那の炎でも脅威ではあるが……。

実際、火傷の痕がちりちり傷む。久々に被ったアンドラステの火の粉は強烈だった。

激情のみの観念巫術だけであれだけの熱量を引き出す辺り、女王の干渉力は神話級だ。

さすがは《戦争と勝利の女神》である。純粋な干渉力だけで見れば、噂の帝国丞相にも比

肩し得るかもしれない。

——とはいえ、そこに指向性を持たせる言語巫術が苦手では話にならない。

そして、今から戦うアルⅡイクシル・ディアウスはその真逆だろう。

アルⅡイクシルの身長は三・五クーデ（約百七十五センチ）程だが、肉付きは悪い。白いさらしを巻いている両手両足は細く長く、その胴もすらりというよりも、ひよろりとしている。

樹皮の様な褐色の肌も相成り、風が吹けば飛んでいく木の棒を髻髻とさせる。

頭は探求士らしい白の頭巾で隠れているが、その下の波状毛の黒髪は何だが切り方が大雑把だ。その上、目蓋が重く、開いているだけでも大変そうな細い焼け土色の眼——アンドラストの重んじる威厳には甚だ欠ける。

挙句の果てに精霊への干渉力まで極端に小さい。ボウディツカがこれまでに見た干渉紋の中でも一、二を争う小ささだ。

ただ、その小さな干渉紋は整っている。巫術師と呼ぶに足る干渉紋だ。おそらく、幼少の頃から言語巫術に慣れ親しんできたのだろう。探求士ほどの知識人ならば、言語巫術の嗜みがあるのは当然だが、祝詞を唱えているわけでもないこの時点で既に、彼の支配下にある守護精霊が規則的な展開状態にあるのは驚きだった。

——さすがはウルルの探求士様だ。あたしらみたいな半端者とは違う。本物の第三世代巫術師というわけか。

おそらくアルⅡイクシルは息をするように言語巫術を使える。

無論、ウルルの探求士ならば、皆、似たようなものなのだろう。だが、こんな辺境では滅多に見られない類の干渉紋だ。特に干渉力が馬鹿高くとも、そこに指向性がまるでないアンドラストを見た後では、その差が著しい。

「えーと、僕はこの《カムヌ》を使わせてもらいます」

そう言って、アルⅡイクシルは持っていた藜杖を掲げた。どうやら《カムヌ》というのは御大層にも藜杖の銘らしい。もともと、藜杖とはいっても、実際には藜あなごではなく、藜を模した結晶細胞だろう。アルⅡイクシルの身の丈ほどの杖は天然の藜としては長過ぎる。

「つまり、その藜杖と白衣があんたの得物ってわけだ」

「……そうなりますね」

アルⅡイクシルはやや怯えたように答えた。

正体を看破されて焦ったのかもしれない。彼の精霊結晶はあの藜杖だけではない。男にしては細い肩に羽織っている《純白の外套》は神御衣カムミンであり、神御衣とは精霊結晶の繊維で編まれた衣を指すのだ。

——おそらく、あの純白の外套にたんまり溜め込んである精霊の化学エネルギーを用いて、《カムヌ》とかいう藜杖から言語巫術を放ってくるわけだ……。

「じゃあ、あたしはこの山刀一振りですってやるよ」

ボウディツカは高らかに言い放つ。あちらと違い無銘で特に工夫もない一品だが、手には馴染んでいる。それにボウディツカは得物に拘泥せずともよい。アル||イクシルの腕っ節が弱いことは一目してわかる。白兵戦は苦手なはずだ。巫術が発現する前に、懐に飛び込みさえできれば、ボウディツカの勝ちだ。

チーシューイという奴隷が苦々しい顔をしているのも、その傍証足りえる。本来、こういった斬った張ったは賢者<sup>ウラマー</sup>ではなく、奴隷<sup>マムルグ</sup>の役目なのだろう。

「では、まずは十歩離れてください」

とアル||イクシルは要求してきた。

「これは僕の実験ですから、条件は僕が決めます」

「わかった。従おう」

ぞろぞろと観客が集まってきたこともあって、ボウディツカは素直に十歩離れ始める。

距離を置かせられるのは予想通りだった。アル||イクシルの基礎干渉力そのものが小さい事も鑑みれば、間違いなく言語巫術が主体となる。ならば、祝詞を唱えきるまでの時間を稼がねばならない——といったところか。

ボウディツカはちようど十歩で向き直り、問いかける。

「で、決闘場は？」

「実験場はこの大地そのものとしましょう」

アル||イクシルは視線で女王に許可を求め、女王は黙って頷くことでそれを与えた。

「それと『殺したら負け』『気を失ったら負け』『敗北宣言をすれば負け』——それ以外の制限はなしです」

「『殺したら負け』……ねえ。何なら、あたしは木製の山刀ですってやるうか？」

「いえ、その腰に下がっている金属の山刀で構いません」

「……いいんだね？」

「峰打ちでお願いしますよ。ああ、それと『一対一の原則を破ったら負け』ですからね」

「あんた相手に他人の手を借りる必要はないよ」

ボウディツカは放言し、愛用の山刀を抜く。

すると、アル||イクシルは手に持った藜杖を下段に構えた。

攻めるなら上段。守るなら中段。それがこの手の長物の定石である。

——だが、下段とくれば、これは……。

斬り合いで考えれば『後の先』狙いだ。しかし、このアル||イクシルにそんな技量があるとは思えない。

——やはり、藜杖から放たれる言語巫術に注意すべきか？

ボウディツカが脳裏で戦術を組み立てた頃に、アル||イクシルは



「では、チーシュイ。開始の合図を」と最後の指示を出した。チーシュイは頷き、大きな声で数を数える。

「三……、二……、一……、始め！」

合図と共にボウディツカは距離を詰める。

速攻——それがボウディツカの戦術だった。十歩の距離なら、言語巫術発現前に山刀でぶん殴れるという判断だ。

一方のアルイクシルはその手首を捻り、その勢いで……、

**いきなりその藜杖を投げつけてきた。**

——不意打ち？ だが、

「甘いっ」

ボウディツカは足を止め、山刀で薙ぎ払う。

所詮は奇策。意外だったのは事実だが、見切れぬものではない。

だが、ボウディツカが次の手を警戒しようとした瞬間に……。

アルイクシルは背中を見せて逃げだしていた。しかも、全力疾走だった。

「何っ？」

驚いたのはボウディツカだけではない。周囲の観客も啞然としていた。いかにボウディツカが尤物とはいえ、アルイクシルからみれば、己の半分ほどしか生きていない小娘だ。

そんな相手に臆面もなく逃げの一手を打ってくるとは……。

ボウディツカも山刀を投げ付けかけ……踏みとどまった。アルイクシルもそれを検討

済みなのだ。

——ちようど、背中の白衣が邪魔になっている。あれがウルルの神御衣ならば、並みの甲冑以上の防御力を誇るはずだ。

そもそもこの山刀は投擲用ではない。いかにボウディツカといえども、全力逃げている（動いている）目標へそこまで正確に命中させる自信はない。

「くそっ」

ボウディツカは山刀を持った腕を下げる。

「『どうした。勝負はまだ続いているぞ？』」そこでチーシュイという奴隷男が口を開いた。「アルイクシルからの伝言だ。『それとも降参するか？』だとさ」

……勝負は徒競走の形に成り始めた。

アルイクシルの足は速くない。だが、藜杖を手放した彼は両手が開いている。

一方のボウディツカは片手で山刀を持っているから、どうしても足が遅くなる。

——駄目だ。すぐには追いつけない。……これが狙いか。

白衣の後ろを追いかけながら、ボウディツカは舌打ちする。

最初から、まともに戦う気などなかったのだ。

——しかし、このまま逃げ続ける気ではあるまい。こちらの隙を見つけて仕掛けてくるはずだ。その時に振り返りにする……！

……ところがアルルクシルはそのまま逃げ続ける気だったのだ。

開始二十分後——二人はまだ徒競争を続けていた。

ボウディツカはもう一つ気付いた。アルルクシルの手足が長く瘦躯——という頭でつかちな体格は、持久走向きと言えなくもないのだ。細身というのは、筋肉や脂肪が少ないというだけでなく、骨格そのものが細い事を意味する。その分、余計な『重り』がない。短距離走ならば、確実に勝てるが、既に距離は開いてしまっている。最初に一度だけとはいえ、足を止めてしまったことが失敗だった……。

開始四十分後——ボウディツカはどうとう脚を止めた。

疲労もある。が、それ以上に、体力ならば負けないという意地で判断を誤ったと気付いたのだ。

よし、認めよう。あいつは腕っ節が弱い。頭の中身もあの歳で白衣なのだから、たいしたものはない。だが、持久走は人並みだ。とりあえず、このまま走り続けるのではなく、別の方法を考えなければ……。

『……風の裏の昴、星の裏の夕風、万成すもの、至小さきものよ。我が希い故に、我が手に集え。我が望み故に、我が標と成れ。未だ見えざる我が道を開け……』

——言語巫術？ ……それもこの祝詞は大気干涉系か？  
反射的に汗だくのボウディツカは身構える。同時にアルルクシルが言霊を結ぶ。

「《希望故に道あり》」

そして、その巫術が発現する。

それは大気中の精霊に干渉し、その力で風を起こすものだった。それだけだった。だが、発現と同時にアルルクシルは砂を投げつけた。風に乗った砂はボウディツカにかかった。只でさえ、汗でべとべとなボウディツカはその上に砂をかけられて、凄く不快になる。思わずボウディツカも足元の砂を握って投げ返す。が

「《希望故に道あり》」

と、再びアルルクシルは巫術が発現させる。巻き起こった向かい風で、砂がボウディツカの方に帰ってきた。

「………」

どうもあの男は干渉力こそ貧弱だが、気流操作は得意らしい。いわゆる最終増幅係数があるかもしれない。

二人分の砂をかぶって、わかったのはそのくらいだった。

「……いや、これはまずいぞ」

ボウデイツカの口から焦りが零れる。

開始一時間後——ボウデイツカはまだアル||イクシルと追いかけてつこを続けていた、あの風を起こす巫術の厄介さに気付いたのだ。投げつけられたのが、砂ではなく、硝子片だったら、『不愉快』ではすまない。まして、粉末状の有毒物質を流されたら……。無論、それらの用意がないから、アル||イクシルは手元の砂を投げつけたのだろう。しかし、ボウデイツカが追跡をやめ、アル||イクシルに時間を与えれば、その限りではなくなってしまう。

そもそも、アル||イクシルはボウデイツカとほぼ一定の距離を保っているが——よく考えれば、それはおかしい。瞬発力だけなら、絶対にボウデイツカの方が上なのだ。なら、走りに緩急をつければ、距離を縮めることもできるはずだ。ところが、ボウデイツカが後の失速を覚悟で、全力を出してもアル||イクシルとの距離はほとんど縮まらない。それどころか、速度自体あまり上がっていない気がする。

——あの《希望故に道あり》<sup>ベニエ||ニア||パナ||ンジア</sup>とかいう巫術の応用で、あたしは常に風下にされているんだ……！

だから、空気抵抗が邪魔で速度が思うように上がらない。そのため、アル||イクシルに追いつけない。ボウデイツカが分析と対策を進めかけた頃……。

『……光よ、今、我らを導け。偽りの工匠、打ち破らんがため。邪悪なるもの、標榜せしもの、其は万軍の主。されど、我が本質は探求者。故に伏せず、屈せず、退かず。この手にあるは、神追い人の杖』

またアル||イクシルの言語巫術だった。しかも《希望故に道あり》<sup>ベニエ||ニア||パナ||ンジア</sup>とは趣が違う祝詞だ。——勝負に出る気か？

ボウデイツカは速度を上げる。今度ははっきりと距離が縮まる。できれば、発現前に山刀の間合いまで近づきたい。だが、一時間走り通しているボウデイツカの脚には、本来の俊足がない。

だから、間に合わなかった。

距離はおよそ十歩、開始直後の位置にまで縮まった時。

「『我が名はテイアウス天空——其が鳴る音は稲の妻。我、振りかざすは真実の旗クウエリ||イクテイヒリ《真、明らかなる時》』」

アル||イクシルの巫術が発現した。

——発現基点は背中の外套？ いや右腕？ 違う、あのさらしかつ！

彼が両手両足に巻きつけていたさらし——その右腕の一本がまるで生き物のように伸び

始めたのである。

——あのさらしも神御衣だったのかよっ！

まんまと白衣藜杖に気をとられていた自分が嫌になる。

アルⅡイクシルの人差し指と小指から『伸びたさらし』は二重螺旋を形成し——もし、知っていれば『コイル』という言葉を連想しただろう。だが、その長さが尋常ではない。

推定二十クーデ（十メートル）。

十歩の距離にいるボウディツカは完全にその『伸びたさらし』の射程内だ。

そして、アルⅡイクシルが容赦なく『伸びたさらし』を横薙ぎにする。

「おおおっ！」

ボウディツカは腰を落とし、さらに前転することでそれを躲す。我ながら驚異的な運動能力だ。

アルⅡイクシルの顔に驚きが浮かぶ。まさか回避されるとは思わなかったらしい。そりやそうだ。ボウディツカ自身、もう一度やれと言われても無理だ。

だが、それでもアルⅡイクシルまでは五歩の距離があった。未だボウディツカの山刀は届かず、アルⅡイクシルの『伸びたさらし』が届く間合いである。

アルⅡイクシルがもう一度『伸びたさらし』で横薙ぎにする。

距離が近い分、回避は難しい。

ボウディツカはやむを得ず、その『伸びたさらし』を右手の山刀で受ける。

そのまま、左手でアルⅡイクシルの頬を殴る……。

……寸前、山刀経由でボウディツカの右手に何かが亜光速で這い寄った。

——電気？

猛烈な熱さと痛みと痺れの中、アルⅡイクシルがにやりとするのが見えた。

——あいつ、このために『金属』って……やばい！

思わず『金属』の山刀を離そうとする。だが、既にボウディツカの運動神経は脳からの命令を受け付けない。

**結局、ボウディツカは一度も山刀を振るう前に氣を失った。**

\*\*\*

「……これは酷いな」

それがチーシュイの第一声だった。どうやら、アルⅡイクシルたちを追いかけ、遠目に一部始終を見ていたらしい。ボウディツカを倒した後、彼女が気絶していることを確認し、安静にさせるために横にさせ、さて走り疲れたから僕もそろそろ倒れようか——としたところで、チーシュイは傍に駆け寄り、抗議の声を上げたのだった。

アルⅡイクシルはしばらく黙っていた。別に奴隷の抗議にたじろいだのではない。単に疲労で口が回らないのだ。藜杖を手にしていれば、それを支えにしていただろう。周囲を見渡すとテイルⅡナⅡノグの面々も続々と追いついてきている。とはいえ、さすがに皆、汗をかき、息を乱している。そんな中、平然とアルⅡイクシルに訴えるチーシュイはやはりずば抜けている。

「……僕は規定を守った」とアルⅡイクシルは疲れた声を出す。「脈はさつき確認した。後遺症はないと思うし、放っておけば目も覚ます。何せ、若いからね」

「そうではない。こんなやり方で敗れたこの娘が哀れだと言っているんだ」

「……おいおい、この娘は一流の武者だろう。僕みたいな貧弱野郎が勝つやり方が幾つもあるのかい？」

この一言にテイルⅡナⅡノグの面々がざわついた。翻訳の問題もあるようだが、『アルⅡイクシルがボウディッカを倒した』という構図に驚いているようだ。それどころか、ボウディッカの腕前を知る故の恐れもあるらしい。彼らは遠巻きに見ているだけで近寄ってこない。

「この娘——この若さ、しかも女の身で、あれ程の腕前に到達しているんだ。才能もあつたのだろう。だが、それ以上に欠かさぬ鍛錬の証だ。正直、虫の好かん女だが、その努力だけは認めたい」

それはチーシュイの真摯な言葉だった。どうも武者者として彼女に共感するところがあるらしい。対するアルⅡイクシルの言葉は拗ねた子供のようなものになってしまう。

「……アルⅡマーニウみたいなき事を言うんだな。君も所詮は強者か……」  
結果、お互いに黙り込む羽目になる。

### そこでボウディッカがいきなり立ち上がった。

アルⅡイクシルは絶句した。遠巻きで見守るものたちにも声があがる。確かに放っておいても目覚めると判断した。だが、まさかこんなに早いとは思っていなかった。脆弱なアルⅡイクシルからすれば、恐ろしい体力だ。

そして、開口一番、ボウディッカは高々と宣言する。

「あたしの負けだ！」

その言葉に面食らい、アルⅡイクシルはさらに絶句した。だが

「だから、先の戦術と巫術について教える」

とボウディッカが続けると、アルⅡイクシルは三度絶句するしかない。

「教える」

とボウディッカは矢継ぎ早に凄んできた。アルⅡイクシルは嫌々口を動かす。

「……えーと、先程のは奇策です。二度は通じませんよ」

「だが、応用すれば、次に活かせるかも知れない」

「……それって、次は僕が著しく不利になる気が……」

「おまえは帝国の先進技術を伝えに来たんだろう。なら、さっさと教えろ」

「……僕も身の安全を考慮したいのですが……」

「どの道、そのチーシューイとかいう奴隷男が傍にいる限り、あたしにあんたの暗殺なんて無理だ。安心しろ」

——……それでどう安心しろと？

アルリックシルは頭を抱えなくなった。

とはいえ、一方でボウディツカの態度に感心していたのも事実である。己の負けは素直に認め、言うべきことをはっきりといい、習うべきと考えれば、喰らいついてでも教えを請う。生徒としては実に魅力的であった。

気が付くとアルリックシルは草の上でボウディツカのために講義を始めていた。

「あの電撃系巫術はアー……いえ女媧氏の《招妖幡》という巫術が元になっています」

「女媧氏？」

「……鵬雛子の方が通りがいいでしょうか？」

「鵬雛子？ あ、鳳雛先生の巫術か！ そうか《黒衣の魔女》の！」

ボウディツカは興奮で震えていた。

アツザフルで《黒衣の魔女》と呼ばれる彼女は、氏名を鵬翦、字を雛子という。あるいは氏と字を連ねて『鵬雛子』と呼ばれ、またボウディツカのように敬意をこめて『鳳雛先生』と呼ばれることもある。

彼女はチーシューイと同じ《夏の国》の生まれで、姫姓あるいは風姓と言われているものの、詳細は不明である。いずれにせよ、彼女の名がこの辺境にまで轟いているのは、出自ゆえではない。この《黒衣の魔女》は《白衣の賢者》と同じウルルの探検士だ。しかし、その実績はアルリックシルの比ではない。

彼女は十三歳の時に二進法を発見した。

彼女は十四歳の時に二項定理の発見し、さらに虚数概念（複素数平面法）を提唱した。

彼女は十五歳の時に微分を発見した。

並べるだけでも凄まじい業績である。

その結果、彼女は志学十五にして、ウルルの最高位たる《黒》にまで上り詰め、《瞑天なる漆黒の法衣》を授与されている。これはあの《帝国学会第一先導者》ミンガラマと共にアツザフル帝国を代表する探検士であると認められた事を意味する。

そして《黒》に上り詰めてから、さらに現在に至るまで十五年、資金に余裕ができたこともあってか、研究内容こそ純粋数学からは離れたものの、舞台を生物化学に移しての実績にはこれまた列挙に暇がない。

ボウディツカにすれば、自分と同じ年頃で歴史に名を刻んだ女傑として印象深いのだろ

う。いやそれどころか、ある種の憧れがあるらしい。大人びた彼女らしく、うっすらと頬を紅潮させていた。

——風聞だけでこうも魅了するとは……相変わらずあの女は若い娘を誑し込むのが上手い……。

アルリックシルは思わず息を吐く。

だが、ボウデイツカはそんな苦悩をよそに「ところで『女媧氏』とはなんだ？」と質問を重ねる。

「今、彼女が使っている筆号ですよ。元々は夏国に伝わる創世の女神だったのですが、氏字の『鵬雛子』で事足りますから、あなたが知らないのも当然です」

かつて《黒衣の魔女》アルリシヤイターナア・カバール・アズワドは原始生命が自己複製能力を獲得するまでの化学的過程を研究していた。その際、粘土が有機物を吸着する性質に注目する。いわゆる『表面代謝説』の走りである。

「なるほど、その手の界面は化学反応が起こり易い。触媒に使えそうだな」

「はい。黄鉄鉱などは表面で蟻酸を生成しますが、この時のギブズエネルギー変化は負になりますからね。これは『生体のエネルギー通貨』と呼ばれるアデノシン三リン酸が加水分解される時と同じで……いや、話が逸れました」

とにかく《黒衣の魔女》はこの『有機物を吸着する粘土』に注目した。粘土の界面で高分子が合成された際、その高分子の形が粘土の界面に鑄型として残り、連鎖的に同種の高分子が合成される事がある。

言わば、『自己複製能力を持った粘土』に着目したのだ。

結局ここから生命の起源を説くことは仮説に留まったが、同時に精霊結晶の生成に『自己複製能力を持った粘土』を応用すると、他に類を見ない形質を発現した。彼女は特殊な結晶細胞が大いに気に入ったらしく、夏国の創世神話から《女媧泥》と名付け、後に自分の号として『女媧』を使うようになったという。

「で。その《招妖幡》という巫術にもその研究結果が流用されています」

元々、アツザフルには、情報伝達、部隊識別、士気高揚などに用いられる『旗』を操る軍用巫術がある。媒体とする布の形状を変化させることで、一種類の形状しか持っていない場合よりも、より多くの情報を、より広い範囲に、より強力に印象づかせることを目的としていた。

この布の形状変化を特化させたのが、女媧氏の《招妖幡》ツァオヤオファンである。

それに対し、形状変化の際に用いられる電流の特性に着目し、特化させたのが、アルリックシルの《真、明らかなる時》クウエリリイキテイヒリである。

筋電繊維に似た構造を精霊結晶繊維のさらしに持たせ、蓄えておいた化学エネルギーを巫術で電気エネルギーに変換、通電させることで、予め設計しておいた特定の形状を取

らせる——ところまでは、この巫術の原型と同じであり、女媧氏の《招妖幡》とも共通することだ。が、アルルクシルには《招妖幡》のような複雑怪奇な運動をとらせるだけの力量のない。そのため、取りうる形状はせいぜい一つか二つである。ただし、その際に必要となる電位差を利用することをアルルクシルは思いついた。これなら、巫術の才覚に乏しく、干渉力も小さなアルルクシルでも使いこなせる。

「なるほど、筋肉細胞の活動電位を応用してるわけだ。やっぱあれか、南方の電気鯰みたいな、その『発電細胞』を積み重ねて、回路で繋いでんのか？」

「……凄いですね」

アルルクシルは感嘆していた。隣で聞いているチーシュイはちんぷんかんぷんという顔だ。これに限っては、チーシュイが特段無知と言うわけではない。

一流の探士として、自分の専門外には疎いものだ。アルルクシルとて、一時期、黄鉄鉱の触媒作用に熱中していたからこそ、この分野を語ることができるだけだ。

ところが、ボウデイツカは今のわずかな説明だけで、《真、明らかなる時》の本質を把握しつつある。

——本当にこの娘は何者だ？

この理解の速さだけではない。アツザフル語を流暢に操る事や《黒衣の魔女》についても知っている事から考えても、帝国の事情にも相当精通しているとみていい。その上でチーシュイも認める武芸の腕前を具えている。

——……麒麟児と呼ぶに相応しい大器だな。

アルルクシルは一瞬でも過去の己と現在のボウデイツカを重ねた自分を恥じた。やはり、彼女はアルルクシルよりもはるかに上である。

だから、辺境の英は再び鋭い質問を飛ばす。

「では、旧貴族——かつての世襲制巫術師のように大気に放つ『雷』<sup>神鳴り</sup>としなかったのは、あなたの一次干渉力の乏しさゆえだな？」

「ええ、対象を直接接触に限定したのは苦肉の策です」

ボウデイツカの指摘どおり、アルルクシルの貧弱な干渉力では利用可能な電気エネルギーもそれ程多くはない。外部に雷気を放つといっても、絶縁体である空气中を走らせる事は難しい。電圧を高めれば、不可能ではないが、それでは電流が弱すぎて、意味がない。しかし、目標がヒトであれば、基本的に導体だ。何しろ、紛い物ではない筋電繊維そのものなのだから。一応、皮膚という絶縁体が覆っているものの、それほど強力でもない。直接接触させれば、わずかな電圧でも（つまり、大電流でも）通電させることができる。その一瞬で蓄積しておいた電力を一気に放てば……どうなるか？

無論、使い手はアルルクシルである。その電力は後世に開発される乾電池起動の携帯式電気銃程度のものだ。



しかし、それでも一時的な『無力化』には十分だった。

ただ、いかんせん、アル||イクシルに実戦経験は乏しい。巫術の発現及び命中が円滑に  
いかない可能性もあった。だから、ボウディツカを走らせるという下拵えしたしらをしたのだ。

そう解説を終えると、ボウディツカは待ちきれないように別の質問をしてくる。

「では、次にあの藜杖だが、わざわざ銘を伝えたのは何として注意を引き付けるための  
つたりだな？」

「その通りです。もっともあの藜杖の銘が《カムヌ》というのは事実ですが」

ボウディツカは「ほう」と驚いた。

「銘があるほどの杖か。そんなモノを何として投げ捨てるとは大胆だな」

「……いや、どの道、僕はあの《カムヌ》を使えないんですよ」

「使えない？ あの《カムヌ》とやらは精霊結晶で出来ているんだろう？」

「そうみたいです。でも、情報連結が拒絶されるんですよ」

「情報連結を拒絶？」

ボウディツカは意味がわからないという顔をした。気持ちはわかる。情報連結しない精  
霊など、そもそも精霊の定義を満たしていない。

「例えば、僕とチーシュイから等距離のところに精霊結晶を一欠片置ひとかけらくとします。この場  
合、空気中の精霊密度が均一なら、その結晶の精霊は僕との情報連結を拒絶し、チーシュ  
イと情報連結を優先します。彼は言霊コトダマや祝詞ノリトを習う機会がなかったために、言語巫術は使  
えません。が、精霊に対する干渉力そのものは極めて高いので、精霊は僕よりもチーシュ  
イを選ぶのです」

「あなたの干渉力は貧弱だしな。たが、このチーシュイとかいう奴隷が精霊結晶から離れ  
れば、精霊はあなたとの情報連結を優先するだろう。干渉力の強さは距離の二乗にほぼ反  
比例するからな」

「その通りです。だから、僕が羽織っているこの白衣の構成精霊に、チーシュイが情報連  
結を行うことはできません。逆にチーシュイがこの白衣を羽織ったら、所有者である僕と  
の情報連結も精霊は拒絶します。ところが……」

あの《カムヌ》という藜杖を構成する精霊は、アル||イクシルが触っていても——すな  
わち零距离接触状態であっても情報連結を拒絶するのだ。それどころか、アル||イクシル  
よりもずっと干渉力の強い他の人間に触らせても、誰一人情報連結に成功しない。

「……それ、単に壊れているんじゃないの？ 精霊を結晶化する過程で温度を上げ過ぎた  
から、情報連結用受容体が凝固しちゃったとか？」

「……最近はその可能性も疑っています。実際、人間とだけではなく、他の精霊との  
情報連結もできないみたいですから……」

「接続できない精霊なんぞ、役立たずもいいところじゃねーか。なんでそんなもの持ち歩

いてんだよ？」

「師匠シヤイツの命令なんですよ。さすがに最近は僕も嫌になってきているんで、今回のように扱  
いもぞんざいですがね」

「ふーん、まあ、後で回収したら、あたしにも調べさせてくれ」

と、ボウディツカはあくまで旺盛な好奇心を隠さない。もともと、アルⅡイクシルが十  
四年がかりで調査しても推測の域を出ない難物である。今さら、機密もないだろうと「構  
いませんよ」と認めた。

「で、アルⅡマーニウというのは何者だ？」

「……そこまで聞いていたんですか？」

「何者だ？」ボウディツカは繰り返した。

「……いや、それは実につまらない話ですよ。所詮は私事わたくしごとですし」

「なら、尚のこと聞いておきたいな。それとも奴隷には話せて、あたしには話せないと？」

「そりゃあ、彼とあなたとは……はいはい、わかりましたよ」

若気の至りを披露したくはなかったが、アルⅡイクシルは音を上げた。

「……僕が十二の頃、河原で遊んでいたのです」

アルⅡマーニウというのは、その時の遊び仲間である。そして、その時の少年集団の中  
で最も体躯に優れていた。今も昔も貧弱で、当時は身長も低かった（十代半ばから急に伸  
びた）アルⅡイクシルから見れば、既に偉丈夫と呼ぶに足る少年だった。だからその部分  
をチーシューイに重ねていたのだ。

色々、遊び尽した挙句、少年たちは石投げを始めた。拳大の石を川の向こう岸に向かっ  
て投げるのだ。そして誰が一番遠くまで投げられるかを競おうという話になった。

一番手はアルⅡマーニウで、大きく振りかぶった彼は川の半ばまで石を届かせた。アル  
Ⅱイクシルはその豪腕に感動すらした。その川幅はかなり広かったので、成人男性でも、  
そこまで石を投げられる者は少ないのだ。アルⅡマーニウは恵まれた体躯に溺れることな  
く、鍛錬を怠らない立派な少年であることの証だった。

——これでは勝てない。

とアルⅡイクシルは考えた。実際、二番手三番手と少年たちは次々と石を投げていった  
が、誰一人として、アルⅡマーニウの記録を超えることはできなかった。

そして、最後にアルⅡイクシルの出番になった。とはいえ、チビでガリで運動オンチの  
アルⅡイクシルに期待するものは一人もいなかった。……当の本人を除いては。

身の程知らずにもアルⅡイクシルは勝つ気満々で川辺に立った。

そしてその右手には『緑の縄』があった。

「『緑の縄』？」

「草を引っこ抜いて作ったんですよ」

きよとんと疑問符を浮かべたボウディッカのために、アルⅡイクシルは言葉を補う。

「ほら、川辺に生える単子葉類は、洪水に流されないよう根や茎が強靱な繊維になってたりするじゃないですか。それを選んで引っこ抜き、束ねて結んで即席の縄を編んだんです。さらにその縄の端に拳大の石を括り付けました」

「って、おい、まさか……」

「ええ、簡易投石器のつもりでした。僕は縄のもう片方の端を握り、ぐるぐると回転させ、遠心力を利用して、石を向こう岸に縄ごとぶん投げたんです。その結果は……」

「……聞くまでもない。投石器を使った以上、あんたの勝ちだ」

ボウディッカは明言した。そして、それは正しかった。

石の種類や風の状況に左右されるものの、どんな名手でも、素手で投げる以上、二百クーデ（百メートル）は超えない。しかし、熟練者がしつかりした投石器を使えば八百クーデ（四百メートル）を超える。無論、アルⅡイクシルは子供であり、貧弱であり、投石器も即席のものであった。しかし、それでも同じ年頃の子供の素手よりは、遙かに遠くに飛んだのだった。

少年たちの中でアルⅡイクシルだけが川の向こう岸まで石を届けることができたのだ。

幼いアルⅡイクシルは勝ち誇った。

ところが……。

「卑怯だ——と言われました」

アルⅡイクシルは『僕は規定を守った』と言り返した。そもそも道具を使つてはならぬとは誰も言つてはいないではないか——と。

アルⅡマーニウも言い返した。石投げを競うのに道具を使つてはならぬのは当たり前のことだ。当たり前的事は言うまでもない。

アルⅡイクシルはさらに言い返した。それは僕にとっては当たり前ではない。そもそも、君の『当たり前』は、腕力に優れた君とっては都合がいいだろうが、腕力に劣る僕にとっては都合が悪い。それに従うことで僕にどんな利益がある？

アルⅡマーニウはさらに言い返した。前提が間違っている。腕力の優劣は生まれながらだけで、決まるものではない。そもそも、アルⅡマーニウ自身、元々は貧弱だったのだ。だが、そこで諦めず、頑張つて頑張つて頑張つて、身体を鍛え、豪腕を手に入れたのだ。負けるのが嫌なら、努力すればよい。悔しいと思う心がまだあるのなら、まっとうに石を投げて、俺を見返してみろ。異世界の諺ことわざにもある——諦めたら、そこで試合終了だ。

アルⅡイクシルは激しい怒りを隠さなかった。だから、僕は諦めずに草を編んだんだ。君の言う通り、腕力は先天的なものがすべてではない。だが、先天的なものが大きく関わる。これは僕のように骨格そのものが華奢にできているものにとっては致命的だ。故にこそ、鍛錬以外の手法を探すという努力をしたのだ。

アルⅡマーニウに逆に静かに憤った。俺が気に食わないのは、そうやって楽をして勝利を得ようという姿勢だ。この体軀ではこれが限界だからと拗ねて諦める貴様の性根だ。この腕は俺の努力の結晶だ。だがな、俺は仮にお前のように貧弱な身体であってもこの腕一本で戦ったぞ。

「だから、僕は言ってやったんです。——『それは意味のない仮定だ』と！」

「まさに子供の喧嘩だな」

ボウディツカは冷ややかな声を投げつける。いつの間にか熱弁を振るっていたアルⅡイクシルは自嘲せざるを得ない。

「だから、そういう子供の頃の子供じみた話ですよ。今では悔やんでいます。アルⅡカマル——昔の親友が仲裁してくれなければ、僕は袋叩きになっていたでしょうしね」

ボウディツカはしばらく沈黙した後、妙なことを尋ねる。

「……ちなみに賢者様はその時の事をどう思っている？」

「無制限の競争を好まないという点でアルⅡマーニウの方が大人だったと思います」

「では、質問を変えよう。どちらがより真実に近かったと思う？」

「それは僕です」

ボウディツカはくつつつと笑い……そして、何かを決めたらしい。

「——もう一箇所あんたに案内したい場所ができた」